

1th SAKURA SUMMIT IN KISUKI

第1回 **さくらサミット**
in **きすき**

SAIHAKU



KISUKI



MIZUKAMI

MITO



KITAGOU

“桜”によるまちづくりと地域間交流

島根県木次町

第1回さくらサミットinきすき記録誌

日時

昭和63年4月11日(月)

場所

島根県木次町役場会議室

参加者

秋田県角館(かくのだて)町/柴田町長

群馬県鬼石(おにし)町/関口町長

長野県高遠(たかとお)町/北原町長

奈良県吉野(よしの)町/桐井観光商工課長

岡山県瀬戸(せと)町/井上公民館長

鳥取県西伯(さいはく)町/磯田町長

島根県美都(みと)町/領家産業課長補佐

愛媛県川内(かわうち)町/菅野町長

熊本県水上(みずかみ)村/那須主幹

宮崎県北郷(きたごう)町/高橋町長

島根県木次(きすき)町/森脇町長

■ ■

司会/山下武之(山下プランニンググループ代表取締役)

オブザーバー/吉野蕃人(前島根大学教授)

オブザーバー/金井勝利(株式会社ぎょうせい開発課長)

■ ■ ■

目次

サミット概要	1
開催趣旨	2
出席者記念写真	3
参加町村紹介	4
式次第	12
発言録	13
歓迎挨拶	15
各町村の発言	16
フリートーク	39
提言	43
共同宣言	51
閉会挨拶	52
プレス記事紹介	54

開・催・趣・旨

“桜”は、日本を代表する花で、国土、日本人の一つのシンボルと言えます。時期ともなりますと、国土の緑化と美化の推進役として、桜前線の北上に伴い、全国津々浦々で大勢の人々に潤いと安らぎを与えてくれます。また、諸外国との平和の使者として、国際親善の役割を果たすなど、「日本人と桜」は非常に密接な関係にあります。

今、時代は、国際化、都市化、情報化、高齢化、価値観の多様化等の波と共に、文化・生活・産業経済の諸活動も大きく変わろうとしています。折りしも昭和62年6月に閣議決定された第四次全国総合開発計画では、多極分散型国土の形成を打ち出し、国土づくりはいよいよ地域間競争に拍車をかけることになってまいりました。

しかし、こうした中で地方自治体が成長を続けていくためには、自治体同士の協力関係をより一層強めることも必要であると考えます。地域振興を図る具体的な施策として、四全総にうたわれる「地域間交流」を促進することが今こそ求められているのです。

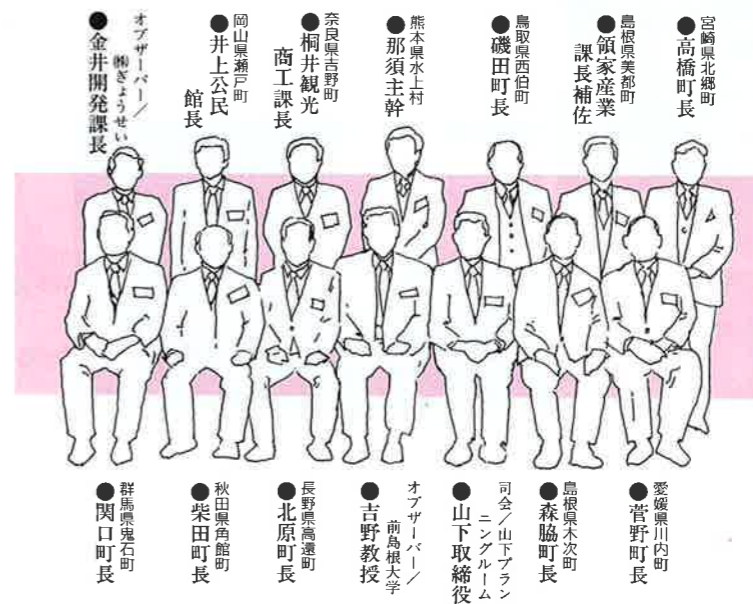
以上の背景をもとに、この度、地域振興の核として、“桜”を標榜する全国の町村が集い、今後お互いに交流を深め、情報の交換を行いながら、“桜”を通じて地方自治体の活性化と21世紀への未来を拓く大きな原動力となることを念願して、「さくらサミット」を開催いたします。

第1回さくらサミット基本テーマ

“桜”によるまちづくりと地域間交流



●出席者記念撮影



参加町村紹介



●吉野町山桜



●木次町

●川内町紅八重枝桜



●角館町武家屋敷石黒家のシダレ桜



●水上村紅普賢象



●美都町古桜



●西伯町



●瀬戸町宗堂桜



●高遠町コヒガンザクラと南アルプス

木次町(島根県)

美都町(島根県)

西伯町(鳥取県)

吉野町(奈良県)

瀬戸町(岡山県)

川内町(愛媛県)

水上村(熊本県)

北郷町(宮崎県)

角館町(秋田県)

鬼石町(群馬県)

高遠町(長野県)

●水上村



●鬼石町

角館町

かくのだてまち



TEL. (01875)4-1111代表
〒014-03 秋田県仙北郡角館町東勝楽丁19番地
交通機関/田沢湖線角館駅から徒歩10分

地勢

仙北平野の北部、雄物川に流入する玉川と松木内川流域に開けた町。水利に恵まれ、稲作を中心に農業が発達。最近では周辺の商工業化、都市化が著しく、各産業に次第に発展の色を見せ始めている。また、緑多い環境も特筆される。

歴史

市街地には、江戸時代初頭に整備された城下町の形態が残存。明治維新に際し、秋田藩は官軍方となり、角館はその最後の激戦地となる。近世武家社会にあって、文化・芸術の醸成に力を注いだ秋田藩の方針は、“文教の地”として今も受け継がれ、明治以降も多くの文人・芸術家を輩出している。

産業・経済

鉄道・国道の整備は、交通の要衝として地位を高め、また経済交流の活発化をもたらした。また広域観光ルートによる観光客の通年化により、地場産業である桜皮細工土産品の売上げも増加している。

文化・観光

全国一の景観を誇る、2キロにもわたる松木内川堤の桜トンネルと樹齢350年のシダレザクラは、桜の町の中でも特に有名。

鬼石町

おにしまち



TEL. (0274)52-3111
〒370-14 群馬県多野郡鬼石町大字鬼石235番地の10
交通機関/高崎線新町駅から上信バスで35分

地勢

群馬県西南部、三波川と神流川の合流地点に位置し、ほとんどが摺曲山地からなる。

歴史

明治以降、二度の合併によって、六村が連合したものが今の鬼石町。山の多い地形により、古くから林業が盛ん。しかし現在では林業にたずさわる人口はほとんどなく、多くはサラリーマンか庭石業を営んでいる。

産業・経済

鬼石町の産出する三波石は、庭石として全国的に有名。また就業人口こそ減少したが、杉・松の人工林の成育は良好である。しいたけ・なめこなどの特殊林産物、こんにゃくなどの特殊作物などの観光農園的な栽培にも積極的。人口流出の対策として、市街地にある縫製工場、弱電気部品工場、製材工場などのますますの発展が望まれる。

文化・観光

三波石峡、三波川桜はともに天然記念物に指定されている。特に11月中旬より12月中旬にかけて、冬山を背景に咲く約3,000本のザクラは格別である。

高遠町

たかとおまち



TEL. (0265)94-2551
〒396-02 長野県上伊那郡高遠町大字西高遠1,806番地
交通機関/飯田線伊那市駅又は伊那北駅よりバスで20分、中央本線茅野駅よりバスで1時間10分

地勢

長野県南部、三峰川とその支流藤沢川、山室川沿いに開けた町。

歴史

江戸時代から伊那地方の政治、経済の中心地として栄え、信州教育文化の発祥地として、政治、教育、文化的方面に多くの人材を輩出。

産業・経済

高度成長期の電子部品製造業、精密機械工業の進出はめざましかったが、オイルショック以降は低迷。農業においては少ない耕地の効率化のための機械化、近代化が進められている。最近では米以外の農作物の産出も増加。なお86%を占める山林は、林業の他、国土保全、観光、保養地など、多面的役割を果たしている。

文化・観光

蓮華寺にたつ絵島の墓には、今も多くの人が訪れる。また、武田信玄築城の高遠城跡に、千数百本に及ぶコヒガンザクラが咲き乱れる様は景観である。

吉野町

よしのちょう



TEL. (07463)2-3081代表
〒639-31 奈良県吉野郡吉野町大字上市80番地の1
交通機関/近鉄吉野線大和上市駅からバスで5分

地勢

奈良県の中央に位置し、吉野川をはさんで南北が山に囲まれた文字どおり山紫水明の地。

歴史

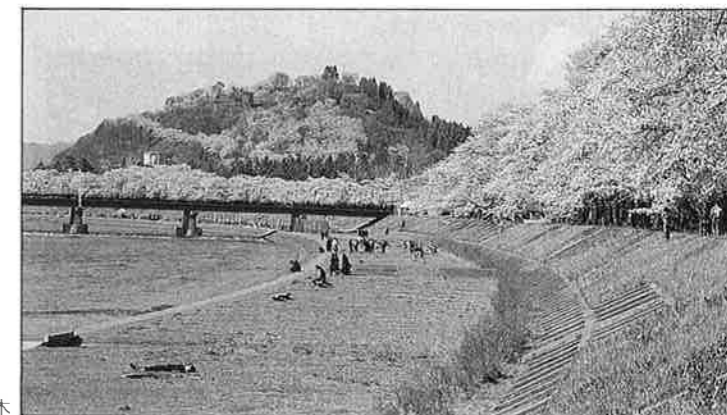
古くから人の生活に適した地であったことを物語る宮滝遺跡をはじめ、多くのいい伝えや伝説に彩られた歴史の町。中でも源義経と静御前の“義経千本桜”の悲話は有名である。

産業・経済

平地が少ないため農業は不振。全域が山でおおわれているため、林業がかなり盛んで、良質な木材の山地として全国に出荷されている。また伝統産業の一つとして、手すきによる国産紙の生産がある。

文化・観光

夏の林間学校、秋の紅葉、冬の雪景色と四季おりおりの魅力をもつ吉野山であるが、特に4月のサクラの美しさは見事で、吉野といえば、誰もが日本一のサクラを思い出すほどに有名。



●角館町古城山と桜並木

瀬戸町

せとちょう



TEL. (08695)2-1111
〒709-08 岡山県赤磐郡瀬戸町瀬戸45番地
交通機関/山陽本線瀬戸駅から徒歩5分

地勢

岡山県東南部、吉井川、砂川が南下し、町面積の半分を山林でおおわれている。東西に細長い平地は土質、気候に恵まれている。

歴史

明治22年の町村制実施以来、数回の合併をへて現在の瀬戸町の誕生となる。

産業・経済

古くから酒米の産地である他、もも、ぶどうなどの果樹、野菜などの栽培も行っているが、85%は兼業農家である。また、工業は食料品製造業のウエイトが高い。

文化・観光

天然記念物の宗堂桜は4月中旬が見頃。三谷公園は春はサクラ、秋は紅葉の名所として有名。



●西伯夜桜

西伯町

さいはくちょう



TEL. (0859)66-3111代表
〒683-03 鳥取県西伯郡西伯町大字法勝寺377-1
交通機関/山陰本線米子駅からバスで20分

地勢

鳥取県西端に位置し、隣接市町村との境に山岳丘陵がある。日野川が町を縦断し、その支流の河川流域に集落が分布。上流は農林、下流は稲作中心の農業地帯。

歴史

豪族鴨部氏により開拓され、古代は出雲との交通の要所となり、近世には山陰・山陽地方の交通の中継地点としてにぎわう。明治には鉄道が開通し、急速に近代化する。最近では農政の転換、林産物の需要減少により、農業の兼業化、労働力の町外流出が進んでいる。

産業・経済

近年、稲作に代わる作物の育成に着手。林業振興対策として、保育施設などの充実、特産林産物の生産に積極的に取り組んでいる。また積極的な工場誘致により雇用の拡大を図っている。

文化・観光

長田神社の境内に密生するシイ、サカキ、ツバキの古木は、天然記念物に指定されている。また法勝寺城址の桜祭、庶民的芸術として古くから伝承されている一式飾りは有名。

美都町

みとちょう



TEL. (085652)2311代表
〒698-02 島根県美濃郡美都町大字都茂1,803番地1
交通機関/山陰本線益田駅からバスで45分(11往復)

地勢

島根県西部、中国山脈に近い山間部に位置し、地形は急峻であり総面積のほとんどを林野が占めている。町の中央を国道が縦貫し、圏域の中心都市に連絡している。

歴史

本格的な開拓が始まったのは奈良・平安朝以降。836年に丸山銅山が発見され、古代においては丸山銅山を中心に発展したと考えられる。徳川時代には銀山天領地として栄えた。

産業・経済

最近では農林業が見直され、町の基幹産業として再認識されつつある。シイタケ、肉牛、野菜など地域に適した特産物の育成にも積極的である。また銅山の近代的開発に寄与した中外鉱業(株)は、町の過疎化、産業の停滞に大いに歯止めをかけており、豊富な地下資源によせられる開発期待は大きい。

文化・観光

双川峡は美都町随一の景勝地であり、養戸の滝は有名で四季を通じて訪れる人も多い。

川内町

かわうちちょう



TEL. (0899)66-2222代表
〒791-03 愛媛県温泉郡川内町大字南方286番地
交通機関/予讃本線松山駅下車、伊予鉄バス川内営業所下車徒歩2分

地勢

愛媛県の中央に位置し、三方を山に囲まれている。地質は肥沃で良質な米麦の生産地である。

歴史

北部からは古墳群などが発見され、古くから開けていたと思われる。曲折を経て昭和30年に川上村と三内村が合併し、川内町となる。

産業・経済

農作物は米麦、みかん、栗・野菜など多様であるが、反面特産物には乏しい。造林事業も積極的に推進し、主産業として農林業に重点を置いている。それに伴い商店街の近代化、また四国縦貫自動車道のインター設置により、住宅団地、レクリエーション地帯としての発展も図っていく。

文化・観光

白猪之滝、唐岬之滝の、四季おりおりの美しさはすばらしい。



●水上町

水上村

みずかみむら



TEL. (0966)44-0311
〒868-07 熊本県球磨郡水上村大字岩野90番地
交通機関/湯前線湯前駅よりバス10分

地勢

熊本県東南部、九州中央山地国定公園市房山をはじめとする山々に囲まれた山村である。

歴史

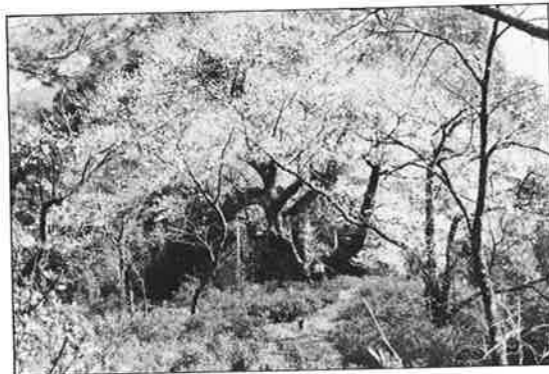
湯山、江代、岩野の三村が明治に合併、それぞれの名は三大字として残っている。昭和35年に村の中心部にダムが建設されるに伴い過疎化が始まった。

産業・経済

広大な面積を有する水上村は森林資源の宝庫である。稲作を中心に農業を奨励しているが、耕地面積が狭く生産性も低い。工場誘致、地場産業である製材工場、焼酎醸造業、製茶業などを推進し、村民の就業の場として充実を図っていく。

文化・観光

市房湖周辺に1万本の桜を増植し、桜園鑑賞、オーナー制度などの計画を積極的に進め、日本一の桜の里を目指す。



●美都町

北郷町

きたごうちょう



TEL. (0987)55-2111代表
〒889-24 宮崎県南那珂郡北郷町大字郷之原乙1,447番地
交通機関/日南線北郷駅から徒歩3分

地勢

宮崎県南部に位置し、総面積のほとんどを山岳が占めている。平地は肥沃で農業に適し、山間部は果樹栽培に適している。

歴史

廃藩置県後、いくつかの県に属し、宮崎県に属したのは明治16年。昭和34年に村制を閉じ、過疎化対策として企業誘致の推進を開始。昭和53年に温泉開発に成功し、副産物の天然ガスの開発を推進中。

産業・経済

農地の宅地化、工業用地化に伴い、農業就業人口は減少し、複合経営、施設園芸などが盛んとなる。林業は古くから船材等の需要が多く、現在は建材としても活用されている。大企業の誘致計画の推進による第2次産業の発展、また宅地化の進展による生活物資流通の活性化も期待されている。

文化・観光

天然林地帯である猪八重溪谷は、点在する滝や秋の紅葉、1,800種類のコケなどで有名。また、北欧ムードあふれる花立牧場の日南海岸を臨む景色は絶景。

木次町

きすきちょう



TEL. (08544)2-1122
〒899-13 鳥根県大原郡木次町大字木次1,013番地 |
交通機関/木次線木次駅から徒歩10分

地勢

鳥根県出雲部の中央に位置し、斐伊川中流に開けた町。降水量が多いのは裏日本の気候特性。総面積の75%は森林で耕地は少ない。

歴史

『出雲風土記』にも来次郷、斐伊郷として登場し、斐伊川の船運の基地としてその名を知られている。昭和に入って一時過疎化が進んだが、企業誘致、住宅施設の増設により、再び定住人口の増加と町の発展が見込まれている。

産業・経済

農業を主体とした地域であったが、兼業化が進むと同時に優良企業の誘致により工業を中心とする第2次産業が大きく伸びている。特に木次拠点工業団地を中心に、この地方の雇用センターとしての発展が期待されている。

文化・観光

情緒豊かな出雲湯村温泉、素盞鳴命と山岐の大蛇の伝説の伝えられる八本杉などが有名であるが、特に斐伊川沿いの2キロにおよぶ桜のトンネルは中国地方随一。毎年、桜まつりは多彩な行事でにぎわう。



●高遠町コヒガンザクラと南アルプス

式・次・第

- 9:00 出席者入場・着席
- 9:05 開会
歓迎挨拶／島根県木次町長／森脇長逸
- 9:15 出席者紹介
- 9:20 各町村の紹介
「桜をいかしたまちづくり」についての
事例発表を行い、相互の意見交換を行なった。
- 11:00 オブザーバーによる提言
前島根大学教授／吉野蕃人
株式会社ぎょうせい開発課長／金井勝利
- 11:15 サミット共同宣言の発表
- 11:30 閉会
閉会挨拶／島根県木次町長／森脇長逸

司会／山下武之
(山下プランニンググループ代表取締役)

「さくら咲く健康のまちづくり」をテーマにサミットの前日「さくらシンポジウムinきすき」が開かれました。作家の童門冬二氏の「歴史にみるまちづくり」と題しての記念講演に続き、環境、産業・経済、施政など多方面から活発なまちづくりへの提言がなされました。サミットはこのシンポジウムと連動して開催されました。



発・言・録

山下武之 ただいまから第1回の「さくらサミットinきすき」を開催させていただきます。

昨日(4月10日)「さくらシンポジウムinきすき」を開催し、いろいろな分野の方に、さくらを中心にして、木次町のまちづくりということで、さまざまなお話をお聞きしたわけですが、本日の第1回の「さくらサミットin木次」は、木次町の総合振興計画を作っていく中で、また、シンポジウムの企画をやっていく中で、全国でいろいろな町がさくらをテーマにまちづくりをなされているということが、わかってまいりました。そこで、それではさくらをテーマにしている町の皆さんに集まっていただいて、お互いにいろいろな問題点を出して、またそれをそれぞれのまちづくりに持って帰るということをしてみたいかどうか、ということで開催されることになったものです。

本日は、全国より木次町に集まっていただきました。まず、ご参加の町村名だけ初めにご紹介いたします。一番遠くから秋田県の角館町、群馬県の鬼石町、長野県の高遠町、奈良県の吉野町、岡山県の瀬戸町、そしてお隣の県であります鳥取県の西伯町、同じ鳥根県の美都町、木次町と姉妹交流という都市交流をしております四国愛媛県の川内町。それから熊本県の水上村、宮崎県の北郷町、そしてこの木次町ということで、11の町村に、今回お集まりいただきました。

今日のこのサミットは、情報交換、それぞれの町がどういうことをやっておられるかという情報交換などを中心にして進めていきたいと思えます。

それでは開会にあたりまして、木次町の森脇長逸町長より、歓迎のご挨拶をお願いいたします。



歓・迎・挨・拶

■サミット実行委員会会長

木次町長

森脇長逸

木次町の町長の森脇でございます。本日は、本町において第1回の「さくらサミット」を開催いたしましたところ、秋田県角館の柴田十郎町長さんをはじめといたしまして、10か町村の町村長さん、また代理の方々には、大変ご多忙のところ、この山陰の奥出雲の木次町までご参加賜りまして、本当に心から御礼を申し上げますとともに、歓迎を申し上げます次第でございます。

木次町は、昔から出雲神話で名高い斐伊川の中流に位置するところございまして、神話・伝説に富んだ大変古い町でございます。日本で唯一の完全な風土記と言われます『出雲風土記』にも、たくさんのいろいろな事柄が出ているわけでございます。温泉のこともあり、あるいはその他のいろいろな史跡の問題につきましても、記録があるわけでございます。こういう町におきまして、私の町といたしましては、21世紀に向かってのまちづくり総合振興計画を昨年立てました。62年度から71年度にわたる10か年の計画を立てました。その先導的な事業といたしましては「日本一のさくらのまちづくり」を第1に掲げ、第2として高齢者社会を迎えますこれからのまちづくりにふさわしい「生涯教育」のシステムづくりを併せながら、さくらを中心とした町をつかっていこうという考えをもったわけでございます。

今回は、昨日のシンポジウムにおきまして、国土庁の菅野利徳先生のお話にもございましたように、多極分散型になるこれからの時代においては、町村がそれぞれ交流を深めながら進んでいくことが必要だという考えが示されたわけでございますが、まことにその通りでございます。本日お集まりの町村長さん方には、それぞれのまちづくりのシンボルにさくらを立てて町の発展・活性化を図ろうとしておられる町村長さん方であると考えているところでございます。

従いまして、今後皆さん方のご意見が、こうしたサミットで十分にお聞きできまして、そしてそれぞれこれをもとにして、まちづくりができるということになれば、大変嬉しい

ことだと考えているところでございます。わたしといたしましては、全国に、今後この運動を呼び掛けまして、情報交換を行いながら、いっそう交流を深め、さらにまたお互いに競争しあって、町の活性化を図っていくということが大切である、と考えているところでございます。

どうか本日の会が成果のある会になりますように、活発なご意見のご開陳をお願い申し上げますとともに、この第1回サミットを機会に、全国さくら同盟のようなものができるものかと期待するものでございます。参会の町村長さんには、今後とも一層のご協力を賜りまして、この会が後々まで続きますように祈念いたしまして、皆様方の遠方からのご来町を心から歓迎申し上げ、ご挨拶に替える次第でございます。ありがとうございました。



各町村の発言 桜をいかしたまちづくり

■ 山下武之 ありがとうございます。では引き続き、今日ご出席されました方々のご紹介をしたいと思います。

初めに、昨日もシンポジウムで元気にお話をいただきました秋田県角館町の町長・柴田十郎様。群馬県鬼石町の町長・関口茂樹様、長野県高遠町の町長・北原三平様、奈良県吉野町の観光課長・桐井雅行様、岡山県瀬戸町の公民館長・井上富士夫様、鳥取県西伯町の町長・磯田俊二様、鳥根県美都町の産業課長・領家哲也様、愛媛県川内町の町長・菅野壽明様、助役さんの代理で来られました熊本県水上村の主幹・那須正弘様、宮崎県北郷町の町長・高橋良則様、そしてただいまご挨拶していただきました島根県木次町の町長・森脇長逸様でございます。

そしてご来賓として島根県木次総務事務所の糸原延市総務課長さん、それから福田敏行政係長さん、田辺和佳子行政係主事さんにお越し頂いております。

そしてオブザーバーに昨日はシンポジウムでコーディネーターを務めて頂きました前島根大学教授の吉野蕃人先生、そしてこのサミットの企画をしておられます株式会社ぎょう

せいの開発課長の金井勝利様。このお二人に、オブザーバーとしていろいろなご意見をお聞きしたいと思います。

それでは本題に入っていきたいと思います。では最初に5分間くらいで——昨日は10分間ということでしたが、今日は出席しておられる方が倍でございますから、その半分の5分間くらいでそれぞれの町の活動とか課題を、まずはお話していただければと思います。トップバッターはやはり、秋田県の角館の柴田町長さんからよろしくお願いいたします。



角館町

■ 柴田十郎 昨日はどうも、皆様方のお蔭で、ありがとうございました。我が町はご承知のように北のほうにありまして、冬は非常に寒い。今朝ぐらの温度が4月いっぱい、ようやくこれがゆるんできますと、花が一斉に咲く。その花の咲きようがよそと違いまして、シダレザクラが3日くらい前、それからソメイヨシノ、それからヤマザクラ、そしてヤエザクラ、その他に梅や桃やすももやその他が一斉に咲き開くということは、実は11月から6ヵ月間雪の中で暮らしてきた私ども、白一色の中で暮らしてきた者が、緑を待ち焦がれ、そしてさくらの花が咲くということは、本当の一年の始まりという感じで受け取るわけ、おそらく皆さん方の土地がらよりは違った「躍動のさくら」というような認識を受けているのではないかと、私はそう思っています。

これは何と言っても昨日申し上げたように、さくらに殉じなければならぬという気持ちにならざるを得ない土地でございます。今日も吉野先生とお話して参りましたが、北緯40度が我が町を通る純粋な線でございますので、秋田県は、この間も知事さんと話をしましたが、やはりこれからのリゾート構想の中で、北緯40度の国づくりということがテーマになりまして、その中で私のほうは、さくらで一役かおうと思ひまして、私は、さくらをどうしてもよくするためには、「相対的な社会資本の充実の中で、道路整備が第一だ、知事さんひとつこれを頼みます。いくら人が多く来るにしても、泊めるにしても歩くにしても、道路が問題だ」ということを申し上げましたが、まあ知事も「もっともだ。十分配慮しましょう」と言っておりました。

それからもう一つは、私の町が400年の歴史を持つ、非常に小さな藩ではありますけれども、歴史的な文教の町だという誇りが町民に非常に強い。その文教の町ということの裏付けが、またこのさくらで象徴されているというふう認識しております、そういう意味で、やはりさくらとは切っても切れない、そういう意味で今回の第1回の会合は大変な意味をもつものだと、喜んで参加をした次第であります。ありがとうございました。

■ 山下武之 ありがとうございます。それでは続いて鬼石町の関口町長さん、鬼石町のことをお願いいたします。



■ 関口茂樹 皆さんこんにちは、昨日は大変御世話になりました。私は群馬県の鬼石町からやってきました関口でございます。

鬼石町

ちょうど群馬県はおそらく、日本のほぼ中央ぐらいに位置するところかなというふうに考えております。私の町はひとつには、約53平方キロ、人口が3月1日現在で9,068人という山間の地であります。11月初旬から12月にかけて寒ざくらが咲きます。冬咲きさくらであります。学名上は「冬ざくら」というふうになっております。昭和12年に、国指定の名所および天然記念物ということになっております。

それともう一つは、ちょうど本州造山運動の姿をそのままに残しております三波石峡でございます。三波石というのは庭園などに使う石であります。それが1.5キロにわたって、大きな石小さな石がゴロゴロいたしておりまして、昭和32年に国指定の天然記念物を受けているところであります、今、この2つを中心に地域の振興を図ろうということで、一生懸命取り組んでいるところであります。

おそらく皆様の町にも、私の町から庭石販売の業者の皆さんがお邪魔をいたしまして、御世話になっているかと思えます。この庭石販売が、年商約60億ぐらいでありまして、私の町の地場産業ということになっておりますが、このところ原石の確保、あるいは内需拡大ということで景気は上向いておりますが、ちょっと造園業が不調になっております。そのようなところが私の、これから地域振興をやっているところ、あるいは鬼石町の概観であります。

私のところのさくらですが、冬にも咲きますが、春にも同じ木に咲きます。すなわち二度咲きをするわけでございます。冬に咲く時には、ほとんど白に近い薄紅色でしょうか。春はやや色をつけまして、ピンクに近い色。冬と比較しますと、色が少し濃くなる。こういうさくらであります。今、このさくらが咲くところが、さくら山という山の頂上5ヘクタールにわたって咲き出しまして、そのさくら山はさくらを5,000本、それと椿を5,000本、ツツジを4,000本植えております。私はまだ町長の新米でありまして、町長に就任して1年半であります。群馬県をお願いいたしまして、「こんなにすばらしいところはないのだから、何とか県立の公園ということでお願いしまして、ようやくこの63年度から3か年計画で、このさくら山の中腹を中心にいたしまして、県立の公園を作ってもらうことになり

ました。県立の公園が約15ヘクタール。生活環境整備林保全事業すなわち森林公園事業ですが、それが約15ヘクタール、合わせて30ヘクタール。そうしますと、このさくら山の中腹から上がほぼ40ヘクタールぐらいが公園になるというふうに考えております。

そうしますと、一番の観光客、県内外の皆さんにお出でいただくネックが、観光バスをいかにして上げて、周遊させるかということになります。このことにつきましても今、国や県をお願いいたしまして、ほぼ3年後には、大型の観光バスがこのさくら山に来て、そしてご覧いただいております。そして今度はちょっと時間がかかりますが、三波石峡のほうまでも行っていただき、この町の2つの大きな目玉でありますところの観光地をご覧いただけるような、そういう周遊のコースを作って、大勢の人に来ていただき、生命をリフレッシュしていただくような、そんな町にしたいと考えております。

私は昨日のシンポジウムで、非常に感銘したことに、「木を育てることは人を育てることなり」、人を育てることだというお話がございました。私の町は1億2,000トンの水を蓄える下久保ダムという大きなダムがあります。これが埼玉そして東京の水瓶であります。今年度も渇水になるのではないかと非常に心配を受けているところなのであります。水源県といたしますと、今、経済交通一辺倒で国が運営されているようでありますが、むしろ私たちのような山間の地がしっかりとしないと、日本の将来は非常に危うくなるのではないかと認識をしております。すなわち「木を育てることは、国を守ることであり」というふうに考えないと、これから本当に地についた日本の発展はありえないというふうに考えたいところであります。

そんなような観点からも、昨日のシンポジウムは私にとりまして、非常に意義の深いいろいろなご指摘を、またご指導願ったような気がした有意義なシンポジウムでありました。今日もまたよろしくお願いいたします。



■ 山下武之 ありがとうございます。続いて高遠町ですが、高遠町は昭和61年の10月に30周年を迎えられた時に、「さくらシンポジウムin高遠」ということでシンポジウムをされたりしております。では町長さん、お願いいたします。



■ 北原三平 ご紹介にあずかりました高遠町長の北原でございます。今回は神話と伝説の国、この出雲の木次町にお招きいただきまして、昨日は第1回のさくらシンポジウムに参加させていただいて、大変有意義に過ごさせていただきました。厚く御礼を申し上げます。

高遠町

さて、長野県高遠町——長野県は非常に広い県で、南北に長い県でございます。私は天竜川の中流に属するいわゆる南信地方でございます。周囲が中央アルプスと南アルプスに囲まれた標高800メートルほどの町で、今日お集まりの10の町村の中では一番寒いところではなかろうか。角館さんは雪が降るところであります。私のほうは雪はあまり降りませんけれども、寒さがたいへん厳しくて、マイナス10度以下になることも多い、そんな土地柄でございます。

それで「日本の屋根」といわれるような、すばらしい高原地帯で、しかも山に囲まれた——田山花袋が昔、「高遠は 山すその町古き町 ゆきあう子らの美しき町」と、こんなふうに高遠の情景を歌にしておりますが、非常に歴史の古い町でございます。鎌倉時代から開けて、南信地方の政治文化、経済の中心として、鎌倉時代から諏訪氏あるいは高遠氏、そして武田信玄の統治するところとなり、そして徳川になって内藤藩が8代180年続いたわけでありまして、そんな古い700年来の歴史の町でありますので、いくつかの史跡に富んだ町でもございます。

東京都の新宿区に新宿御苑という御苑がございますが、これは高遠の内藤の殿様の下屋敷でございます。明治廃藩置県によってこれを政府に寄付した。その跡が御苑になっております。それで新宿は内藤新宿と言われてはいますが、元禄11年に新宿が宿場をあそこに開設した。それは内藤家の一部を使って新宿ができた。そんなような関係で今日新宿とは、新宿のふるさと村というようなことで深い交流がなされているところでございます。そんな町柄でございます。特に大河ドラマで『武田信玄』がさかんに放映されて、全国武田信玄でわいているところでございますが、武田信玄の息子勝頼が高遠に城主として10年住みまして、そしてその弟の仁科五郎盛信という方が、織田信忠の5万の大軍を迎え撃って、少数の5,000でこれを守り、そこで玉砕したようなわけでございます。その高遠城址、そこにさくらが植わっているわけでありまして、その城主の当時の鮮血で染まっているから、今のさくらがあのように美しいのだというように物語られております。コヒガンザクラというさくらでございます。

明治5年に廃藩置県になって、その荒れる城跡をみな悲しんで、そして当時の旧藩士の皆さん方が、同志を募ってさくらの馬場というところにあつたさくらを、明治政府にお願いしてそれを借り受けて、今日は太政官令でそこは国有地ですが、借り受けているわけでありまして。ここにコヒガンザクラを移植いたしまして、そして保護し増殖をして今日に至っているところでございます。

昭和34年に県の天然記念物、コヒガンザクラの叢林としての天然記念物の指定を受けて、そして昭和50年に町の町制100周年を記念いたしまして、町の花・町の木として制定いたしました。そして昭和54年に、「さくら憲章」をつくりまして、「さくらを愛する心は人を愛する心である、平和の心に通じるのだ」というようなことでアピールいたしまして、そしてこの百数十年、先祖が植えて育てていただいたさくらを保護増殖して、そして子々孫々に伝えていこうという決意をうたつた「さくら憲章」を制定いたしまして、そして大切に育てているわけでございます。

特に高遠のさくらの場合は、明治に植えたのはもう百数十年を経ますので、この活性化を図るために、昭和35年頃から幹に土をはりつけまして、そしてそれをコモで巻いておきましたところ、これは学問的に勉強したわけではないけれども経験的に、高いところから不定根が、根がいつばいでまして、それがずっと土の中を伝わって、そして土に届いて、それが根をはびこって、そして今一抱えも二抱えもある木が蘇生をいたしました。そして今まであった幹はみな腐っていたわけですが、高いところからその土をまいた、その土で出た根が土に届いて、その根が今非常に大きくなって、昔の幹がみな腐ったので取り除いて、そしてそれにコンクリートをはって保護しているような木も多く見受けられます。しかし古いものは古いもの、また新しいものは新しくというような考え方で更新を図って、そしてバランスのとれた——つまり古い木もあるし若い木もあるし、中年の木もあるというように、一時に絶えないように考えて子々孫々にこのすばらしいさくらを伝えていきたいと、こんなようなことで今町を挙げて取り組んでおります。

さくらからのまちづくり、全くそのとおりで、一昨年もさくらシンポジウムを行いました。多くの先生方から貴重なご意見を頂戴いたしました。これを機会に、さくらの美しさ——昨日、角館の町長さんもおっしゃいましたが、私のところも中央高速道の開通によって、全くお出で下さる方たちが、近郷近在ではなくてほとんど東京、名古屋、あるいは静岡、群馬、埼玉……あの辺の方たちに非常に多くきていただきます。多い日にはインターが詰まってしまって、10キロ近く渋滞するというような状況であります。狭いところですので、やはり多くの人といっても30万から50万の人を受け入れるということは大変ですので、これらの方々が長く来ていただけるように、さくらと史跡とをいかに有機的に結ぶか、そしてさくらの期間の延長——小林先生が常におっしゃっておりますように、3月から5月頃にかけてのさくらを、どのように配置して、さくらの園を作つたらいいのだろうか。そんなようなことが今、課題で研究をしている最中でございます。

今後とも、皆様方と色々なご意見を勉強させていただいて、さらにいいさくらの園づくりを進めてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

■ ■
 山下武之 ありがとうございます。続いて吉野町。吉野町というと、吉野ざくらといえは有名ですし、吉野杉の林業の町としての吉野です。では桐井さん、よろしくお願いいたします。

■ ■
 桐井雅行 さくらのお話が昨日からずっと出っぱなしでございまして、私の町のさくらというのは、いつ頃から始まったのかさだかではございませんで、伝承では1,300年というところが出てまいりますが、そう古くはないんじゃないかと思えます。『万葉集』というのは、こちらの出雲のほうにもあろうかと思えますけれども、『吉野万葉』というのがございまして、120~130首あるでしょうか、私が勘定するとそうもないのですが、学者の先生方の数のとりようによって違うのですけれども、それを見てまいりましたら、吉野の場合のさくらは一首も出てまいりません。単にさくらは出てまいりますが、吉野の場合のさくらもございません。そういうところを考えますと、1,200~1,300年前には、吉野のさくらはなかったのではないかと私は思っております。

吉野のさくらをやたらに称揚いたしましたのは、何と申しましても西行でございまして、西行の『山家集』の中に、彼が62、3首、吉野のさくらに身も心も捧げ尽くしたようなことを言っておりますから、まず800年昔くらいには、かなりの量のさくらがあったのではないかと思えます。今日に至りますまでに、それはもう大変な紆余曲折があったろうかと思えますけれども、もともと日本人は、さくらに心をよせることがありまして、さくらを見てどんちゃん騒ぎをしようなんてことは、おそらく近世も徳川時代、割合に近くなってからのことじゃないかというふうに思えますけれども、文献など、特に江戸時代の紀行文が盛んになってまいりまして、吉野へ吉野へというふうにものが書かれ出しますけれども、それもあまり古いものは見当たらないようでございます。

もともとの吉野のさくらの発生というのは、信仰に由来するものでありますから、とにかくさくらを植える時期というのは、もう今頃ではダメでございまして、花のない11月の終わりから1月、2月、3月の初めまでじゃないかと思えます。そんな時に全国各地から、大勢の新婚の客たちがやってまいりまして、一本一本植えていったものであったり、あるいはお金のある人は1万本の寄進をしたとかいうふうなことがございますから、おそらく

その昔、自分が植えたさくらがどのように咲いているのかということ、知らないままで亡くなっていった人が多いのではないかと思います。

そうやって育ててこられたものが、明治の末には例の神仏分離がございましたから、ほとんどさくらも壊滅的な打撃を受けたようでございます。その時には、吉野は修験道の地でございますから、その修験道とともに発達してきたさくらであれば、修験道が衰退するさくらもまたダメになっていこうというのは、それも理の当然でございます。ところが、それがおさまりますと、今度は富国强兵策が出てまいります。「日本人たるものはパッと咲いて、パッと散れ」、つまり「さくらの花のように」ということで、非常に国策的に利用された節もございまして、人間がそれに乗っかってきたことは事実でございます。特に第二次世界大戦の末葉には、特攻隊なんていうのはさくらの花のごとくまさに死んでいった。すると吉野の花も、その当時称揚されたようですけれども、昭和20年の8月に戦争が終わってしまいますと、そんなことはいかにも罪をおかしたようなことになってまいりました。そうするとさくらもまた、非常に冷遇されるような時があったようでございます。けれどもその時期をまた過ぎると、今のように、花見の客がいっぱいでございます。

吉野のさくらは、現在まだ咲いていないのでございますけれども、電話を入れてみますと昨日、一昨日、つまり土曜、日曜には大勢の人がやってまいりまして、車の渋滞がかなりおこったというふうなことでございます。大勢の人が入るのは、多い年で春一日でいたい甲子園いっぱいぐらいのお客さんが来る場合がございますし、少なくとも2万5,000、その半分くらいの方がやってくるわけでございまして、もうムチャクチャでございます。

このように申し上げてまいりますと、さくらの花というのは、何て気の毒な花ではなからうか。人間の都合によってよくなったり悪くなったり——まあ、心をおかしくするのがさくらであるかもしれませんが、さくらをおかしくするのはまた人間じゃないかという気がしてしょうがないわけでございます。昨日、今日、こうやって私たちは寄っておりますけれども、もし吉野山でこういうことをやろうとすると、花のない時期に来ていただかないとダメでございます。旅館はとてとれるわけじゃございませんし、こんなおん気なことをやっていたら、町の住民に叱られるぐらいが山でございまして。今は全く生活のためのさくらでございまして、大事にしようという気はありますけれども、なぜ大事にするかという、まちづくりとかむらおこしとか、そんなことは少なくとも町の人は思っていないようでございます。自分たちの生活のためにあるんだということ。子々孫々の生活を伝えていくには、この方法より他にないんだということ。そういうことが心の底につま

さくらにつきましても、私はこういう商売を、出たとたん約1,000本さくらを植えました、以来35、6年になるわけですが、その他には植えておりません。ところが、やはり何かもっと植えなければいかんということで、今のところ5,000本植えようということで、現に今2千数百本は植えております。この方法としまして、私どもはダムを造ったのです。今年の9月か10月頃から水を溜めますが、ダムを造ると当然これはいろいろな施設が水没してしまう。過疎化するわけですね。過疎化させるようじゃいかんから、何とか地域の開発をやれ、振興策を図れと、こういうことを知事に強く申し入れてまして、幸いに知事がよく言うことをきいてくれまして、ずっといろいろな仕事をやってくれました。1,000本も、私はこういう商売柄、あちこちのダムを拝見してまいりましたが、規模は私たちのところは小さいわけですが、周辺の開発ということになりますと、あまりよそ様には負けないような開発ができたのではないかと考えております。今のところ、県で約1,000本くらい注文しまして、さくらを1,000本、現に今、植え終わりました。

そういうことで、これは私どもの一番南よりのほうの地域なものですから、今までありましたのは、中心部の法勝寺に約1,000本であります。それから今度は米子よりのほうに、来年あたりから1,000本くらい植える。そして全体として5,000本にして、さらに近い将来に1万本にまで増やそうと、こういう考えであります。まあ、私のほうでは大山なんていうのがありまして、これが観光の一つのメッカになっておりますが、大山だけではどうに



もならないのでありますから、私のほうでもひとつ、なにを作ろうと。それはやはりダムとさくらを兼ねた開発がいいじゃないか、ということできております。

私どもも、わりあい古い町でありまして、役場の所在地は法勝寺といいますが、この法勝寺といえますのは、京都に、皆さんご承知の法勝寺という寺があります。非常にあの辺は昔、栄えた所です。そういうことのために、昔からの伝承としますところの法勝寺歌舞伎なんていうのをやっている。それから一式飾、これはおそらく島根県の平田市の一式飾は非常にいいものを作っておられますが、あれとは趣が変わっております。私のところは毎年30くらい、町中に点々と一式飾を作りまして、そして皆さんに観賞してもらうということでもあります。これはずいぶん昔からやっております。

そういうこともありますし、もう一つ、ちょっとこれはふざけたような話なのですが、ダムを造っておりますところに白山権現というのが。そこはだれが開いたかといえますと、源資僧都という京都の有名な和尚さん。その和尚さんは、皆さんこれまたご承知の弓削の道鏡の従兄弟です。弓削の道鏡というのは、皆さんご承知のとおり、どうも行儀があまりよくない。その従兄弟ですから、いやになっちゃって、ずーっと山陰のほうに入ってきて、私のところにきたら「これはいいところだ、ここに住もう」というので、弓削の道鏡の従兄弟の源資僧というのに住んだ。こういうところでもあります。現在も、白山権現といまして、ダムのすぐ横にあります。

そういうふうになにの産物もありませんが、景色と、それから人情は非常に真面目なところであります。皆さん、米子からすぐの所でございますから、ひとつおいで願いたいと思います。今日は、昨日承っておりませんので、今日は皆さんの貴重なご体験を承りまして、そして帰りまして立派な開発をしたいと思っております。

ただ、私はひとつ、今日も町長さんに話したのですが、かつて福島県の何とかという町に行きましたら、川土手に非常にさくらの大木が元気で立派な花を咲かせている。なぜこんなに立派になるのかと聞きましたら、そこに県立農業高校がありまして、その生徒が絶えず手入れをするというのです。先ほどお話があったようですが、何か桜という木は命が短い、生命が短いというような話がありますが、嘘じゃないかと思っております。手入れさえしてやれば、いつまでも立派な花が咲くのではないかと私は考えまして、私は今、町民全部に呼び掛けまして、「ボランティア活動で何とかやってくれ」と。その前に職員にも、「職員組合の運動ばかりやらないで、年に4、5回は出て、長靴履いてやれ」と、こう言っているところですが、とても全部の木、それから施設等の維持管理には、これは大

変な金がいりまして、町長は困ったものですから、住民全部の活動に期待せねばならないと思っています。

今日は、資料等はお配りしたと思いますから詳しくは申しませんが、どうか皆さんの貴重なご意見を重ねて拝聴しまして、頑張りたいと思います。よろしく願います。

■ ■

■ 山下武之 ありがとうございます。では続いて島根県美都町の領家さん、お願いいたします。

■ ■

美都町

■ 領家哲也 お早うございます。美都町ですが、島根県は東西に大変長くて、木次まで来るのに車でだいたい4時間かかりました。島根県の西の端のほうになります益田市から、上流18キロくらい上がったところで、津和野町はよくご存知だと思いますが、そういった津和野町のような島根県の西のほうに、場所がございます。大変小さな町で、面積は13平方キロということで、人口も今3,400人をきっております。昭和30年の国勢調査の時には、7,500人いたわけですが、まあそれ以降高度経済成長が続いて、どんどん過疎化が進みまして、今現在まで半減しております。

昭和58年に、山陰集中豪雨ということで、特に石見地域を中心に集中豪雨がおこったわけですが、その時にも1週間くらい交通、連絡手段が全くないということで、道も途絶え、電話線もちろん電気も切れて、まったくの孤立状態ということがございました。被害額がああ当時で160億でございまして、町の予算のだいたい10倍の被害を受けたということで、これから美都町はいったいどうなるんだろうかということで、みな大変とまどっております。何とか復旧工事が進みまして、今はもとどおり、河川等も改修されまして、見違えるように復旧はなされました。ですが、地場産業でございまして、鉱山が美都町にはございまして、1,200年ぐらいの歴史をもっております。これは静岡県にございまして、中外鉱業の所有でございましたが、これも円高等の影響で昭和61年、ですから災害復旧工事がだいたい完了するぐらいの時に、大幅縮小ということで、昨年6月には今度は全面閉山ということで、50人から60人くらい従業員がそこに働いていたわけですが、全員職場がなくなったということで、美都町といたしまして、特に産業があるわけではございません。誘致企業も努力いたしてはおりますが、なかなか進んでいるわけではございませんので、働き場がないということで、何とかしなければいけないということが、今、町の中でも特に言われているところです。

それで、前々から、名前をご覧いただければよくわかると思いますが、「美しい都の町」ということで、時々私のほうにも電話が入りまして、「どんな町かパンフレットを送ってほしい」ということで、度々電話があるわけですが、大変、観光とか特に目新しいものがございまして、町といたしまして観光パンフレットというものも最近はお作りません。そういうところで、いわゆる災害復旧工事が終わって何とかしなければいけないということで、他所からは「何もない町」「通り過ぎる町」ということで、確かに国道191号線が通っておりますが、特に国道沿いに目新しいもの、寄ってみるものというのが全くないわけです。

そこで、これは行政のほうから特に行ったわけではございませんが、商工会青年部のほうから特に中心になりまして、これは中小企業庁のむらおこし事業に取り組んで、これからの美都町、観光、特産ということはどうすべきかということでシンポジウム、視察等いろいろ研修を重ねた結果、「さくらと柚子の里づくり」ということで、美都町はさくらと柚子で今後やっていくんだということで、商工会青年部のほうで独自で企画をし、また看板も立て、方向付けをしてきたわけです。

特にさくらにつきましては、特に美都町に来られて、ここに素晴らしい木次のようなさくら並木がある、というようなものは特にありません。これを10年、20年先につくって行くということで、ここに今後ろに、美都町のさくらの会の会長、商工会の青年部長をしておられます西田利幸さんに一緒に来て頂いておりますが、この方が中心になりまして、今からさくらを植えていくということで、初年度3,000本を集中的に植えております。

まだこれは、一般からさくらの会の会員を募るということで、法人会員からは5,000円、一般の方は会員になっていただいて1,000円ということで、そういう会員になっていただいて、それらのいろいろな保育作業というものを、会の運営の中でやっていくということです。それからさくらの苗木は、皆さんから寄贈を募るということで、1本1,000円をお願いして寄贈いただいて、それを集中的にまとめて、「誰からの寄贈のさくらです」ということで看板もあげているところです。これの指導は、シンポジウム等を重ねた時にも、吉野先生などにも来ていただき、いろいろご指導いただきましたし、視察の時にはちょうど熊本県の水上村のほうにもよせていただきまして、いろいろご指導をいただきました。

今は、何もありません。ですが、10年、20年先に、木次町に負けないさくら並木を作っていきたいということで、頑張っているところでございます。

それから、ちょっと長くなりますが、さくらの関係でございまして、今、美都町では「緑

ざいませんで、村民全体に、さくらがまだ理解されていない部分があるということがございます。そういうことで5年間をめどにさくらを植栽していこうということでございますが、たださくらの本数とか量だけで日本一を誇るということではございませんので、先ほどからお話が出ておりますように、さくらと言いますのは日本人の心、昔からの国の花でもありますし、そういう育てる心の面でも日本一を誇れるような村づくりをしていこうという計画をもっております。

けれども、今後はソフト面の充実を図るということで、多分沖縄の次にさくらが咲くのは、わか村だと思います。今年は4月の2日、3日の土日が満開でございます、さくら祭をやりました。私の村で一番心強いのは、熊本県の方にもものすごいバックアップをいただいております。今年の祭には、直木賞作家の水上勉さんという方がおられますが、この方と女優の浜美枝さん、どういつながりかわかりませんが、わざわざ県のほうの費用で、さくら祭に記念講演会をセットしていただいているような状況で、わか村の、私たちの考え以上に、知事さんが非常に私どもの村づくりに積極的に力を注いでおられるのが、ものすごく力強いような状況下におかれているのがわか村だと思います。

それからもう一つ、さくらに関連いたしまして、わか村には国道が走っておりまして、現在国道の改良工事中ですけれども、橋梁が何か所かかかっておりますけれども、これも全部さくらの名前をアレンジした橋梁にしておりまして、そこ一帯が、そういうさくらの種類、橋梁にあるさくらの種類を植えるという協力。

それからもう一つ、これは経費的には大したことはないんですが、道路の反射鏡というのが、カーブミラーがついておりますけれども、この反射鏡の中にも、さくらのアレンジをしていただいた反射鏡というのをつけていただいております。

まだ私の村につきましては、59年からスタートしたばかりで、宣伝のほうが行先いたしまして、各市から研修が相次ぎまして、対応に、そういう誇れるものがないというところで苦慮いたしている状態でございます。そして今回、こういう立派なシンポジウムに参加させていただきましたので、この10か町村の絆をさらに深めていただいて、さくらで友好姉妹都市を結べるような、私の村もそういうことをやっていまして、そういう方法が検討できるような、つながりのある有意義なシンポジウムということで参加させていただいておりますので、今後とも皆さん方によりしくご指導ご協力をお願いしたいと思っております。以上で終わりたいと思っております。



山下武之 どうもありがとうございました。いろいろお話が出てきております。それでは次に宮崎県の北郷町の高橋町長さん、お願いいたします。



北郷町

高橋良則 宮崎県の北郷町の高橋と申しますが、今回のさくらの研修会に出席させていただきます、本当にありがとうございました。私のほうは、北郷町というのは、日南市、宮崎市、都城市に囲まれた山岳地帯というようなことで、面積だけは179.16平方キロと広いのですが、小さな山村でございます。

私のところは林業関係は飢肥藩が財政糾合を救うために人工造林を早くやっただと、400年近い飢肥沃業という歴史をもった林業があったのですが、これもこの地帯は高温多湿ということで、非常に早く太るということを利用した林業であったということで、船材関係を供給していたわけなんです。ところが、漁船も今日では鉄鋼船、プラスチック船に変わりました。需要は全くなくなって、現在ではわずかに韓国輸出に向けているということです。したがって急激な過疎現象がひとつは出てきた。そして私のところは、歴史的には明治維新の時には勤皇派だったのですが、明治10年に西南の役で西郷郡にしたがったということで、東北と同じように民有地を引き上げられて国有林が非常に多い。そして1万6,000ヘクタールくらいの山の中で、1万2,000ヘクタールが国有林という特殊な地帯なのです。

まあ、木材の需要関係も非常に変わってきたということで、非常に過疎現象が急激に起こってきて、宮崎県は54年度に国体をやったのですが、ちょうどこの頃が、ものすごい私のところの過疎現象の時代で、私は国体の練習場でもということで、中学校には50メートルプールなどを造って準備したのですが、「こんな国体は線香花火だから、こんなことはどうでもいい、企業誘致をやれ」ということで、早く企業誘致を進めたのですが、当時県はあまり関心なかったのですが、小さな工場はいろいろもってくることで、やっとならぬ過疎現象が止まったという状況なのです。

町制を敷いたのが、30年。私が助役をやっている当時だったのですが、それでちょうど今年30年目。町制を敷いたのが、明治22年。そのままの行政府で今日まで来て、ちょうど町制100年という年に、今年なっているわけです。私たちのほうも、この過疎現象を何とか止めたいということで、私はちょうど52年に福岡の貝島炭鉱が倒産したのですが、ここが天然ガスの試掘権、いわゆる鉱区権を、私の行政府のほうに、6億個もっていたのですが、これが倒産しましたから、ここに行って、これを2,000万で買い取って、ボーリングを始めたのが今の温泉開発になるわけです。鉱区権を町がもっておりますから、民間の乱

開発は防げるという事で、ここを福祉ラウンドということで、主として福祉を主体にしたような開発をし、今まで厚生年金事業団あるいは建設省関係の雇用促進事業団、こういうところの資本で開発を進めてきていたのですが、今度は宮崎県が四全総計画によるリゾート開発の、一番先の指定を受けるというようなことになるようで、だいたい内定を受けて、6月頃指定になるんじゃないかと思えます。それで3、4、5町がこの指定の中心区域の開発地域に入る。私のほうもそういう地域に日南海岸国定公園の関係でその中に入るということがございますので、私のほうも今年中にはどうしてもリゾート計画をつくらなければならないという状況です。

実は、昨日、一昨日も、私のほうは民間資本との打ち合わせ。これは私のほうから出たのは関西の財閥で、旭洋商事関係のフェニックス宮崎の開発をやっておりますが、フェニックスが主体になって、宮崎の今度の開発をやるようです。そして青島のほうが宮崎交通さんと近鉄さん、そして南郷町が西武というようなことになりましたが、私のほうはフェニックスの社長が私のところの出身ですから、こちらと打ち合わせをして、あちらで開発してもらおうということにしているわけです。

この開発に、どうしても取り組まなければならないわけですが、その場合に、私は今年の1月にあそこのシンポジウムにも行きました。国有林を活用しての、岩手県の安代町ですか、こちらで池を売りますというシンポジウムがあったのですが、あそこに行って2,700ヘクタールの開発の状況を見て、本当に感激したわけです。私たちも国有林関係あたりを使い、また町有地を——今の計画では町有地はかなりありますので、今まで牧場にしてたのが、昨年閉鎖して、ここは県はリゾート開発——温泉があるものですから、シルバーゾーンの開発といっているのですが、シルバーゾーンだけでは開発にはならないと思うのです。おとともフェニックスとの打ち合わせで、何とか若い者を集めるような開発をということで、シルバーゾーンとしては、私どもの共有林が200ヘクタールくらいあるところに牧場を作っていたのですが、ここでゴルフ場とかそういうものを作ってほしい、と。その下のほうで、ひとつ若い者を集めるような開発、そして温泉でも温水プールあたりをやって、年間若い者を集めるような開発をしてほしいということに打ち合わせをしてきたのです。

私のほうは広渡川の水と、この温泉の水をキャッチフレーズにして開発を進めていきたい。これを彩るものにさくらをもっていきたい。私のところも山ざくらが非常に多いところなんです。山ざくらは2月から咲き始めまして、今はソメイヨシノの満開中でございます。

ですが、この後にヤエザクラが咲いて、そういうものが全部すんだ後に、4月末から5月頃に、こんどは山ざくらでモモカザクラがあり、これが最後になりますが、非常に遅い山ざくらがございます。今後さくらを彩りにもっていくとすれば、昨日の小林先生のはなしで、いろいろな種類を植えろということと、非常に長い時間をかけろということとでございましたので、私たちはこのチェリータウン構想の話を出したのは55年からなんです。牧場の一番上のほうに16ヘクタールくらいあるのですが、そのところに55年からさくらを植え始め、やっとなあ、そこについては6,400~6,500本植わっておりますが、毎年1,000本から2,000本植えております。特に公民館のほうに2,000本ばかり配布して、全体で8,500~8,600本植えてきている。

私のところにある成木のさくら公園というのは、坂本というところに、私が学生時代に、今では農業ですが、その当時は産業区で、その理事長が非常にさくらに関心の多い方で、雨が降るとバケツをもってこやしをやり、わずか2、3ヘクタールの丘なんです。そのさくらに肥料をやっていた。ここは今も枯れずに、やはりきれいに成木のさくら公園ができています。

そして今、私たちがやっているキャンプ場は、私が助役時代に、毎年2万くらい商工会に補助金をやっていた。そして愛好者がその上で育てた。それが今、成木で残っている。私が学生時代に植えたさくらで有名だったのが、熊本城のみゆき坂のさくらトンネル。それから佐世保の水源地のさくら。これなんかは本当に有名で、よく私は学生時代に、姉がいたものですから、熊本に行くときよく見たものですが、2、3年前に佐世保に行った時に、あれを見にいこうと思ったら、ほとんどこれはなくなって、今植えかえつつあるということがございます。

さくらはやはり、さくらに取り掛かったら、長時間かかっている植栽をやらなければ線香花火的に終わってしまうという傾向があるんじゃないかという気がいたします。私のほうも、長時間にわたって、目標は3万本くらい植えていこうということとでございしますが、長時間にわたってこれを植栽して、できるだけこれを愛好者でさくら公園をというものを作っていく、水を彩っていききたいという考え方でございまして、簡単ですが、終わります。



山下武之 ありがとうございます。では最後に木次町の森脇町長さん、お願いします。

木次町

森脇長逸 だいぶ具体的な話も出ていますが、とりあえず私のほうは、具体的な取り組みについては次のところでお話しさせていただきたいと思います。

とりあえず皆さん方にこういう『木次さくら』というのを配ってありますが、これの一番裏を見ていただきますと、木次町のさくらが今どういうふうになっているかということと、それに対する住民の皆さんの関心がよくわかると思いますので、まず一番右上のほうに、さくらの満開の記録がありまして、いつ満開であったか、その時の天候はどうであったかということがありますが、これを見ますと、非常に早く咲いている時や、そうとう遅咲きの時があるということでございまして、まあ去年は8日に満開になっておりますが、多分今年は暖かいから10日が満開だと思いましたが、ご存知のようなちらほら咲きというようにございまして、さくらはやはり天候によって、だいぶいろいろ満開の時期が異なっているけれども、今後の問題につきましては、また後で述べさせていただきたいと思いますが、本日も吉野先生にご助言いただくように来ていただいておりますが、昨日はコーディネーターで来ていただきました島根大学の吉野先生の門下生といいますが、研究会の方に、今後約2年間、今年と来年をかねまして基本的な調査をしていただきたいと思っております。現在の5,000本のさくらの診断をしていただくということと同時に、今後どういうふうなさくらのまちづくりの植樹をやったらいいか。知識とか、その他色々調査していただいて、基本的な計画をつくっていただいて、これに取り組みたいと考えているところでございます。

なお具体的なことにつきましては、昨日にかけましてやりましたことを基にして、さくらの会を中心に進めたいと思っております。できうるならば、64年度あたりから苗木の生産にも取り組みたいと考えているところでございます。後でまた、いろいろなご意見の中で述べさせていただきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

山下武之 どうもありがとうございました。

フリートーク

山下武之 何か、あとから気がついて追加でという方、ございませんでしょうか。はい、それでは吉野町の桐井さん。

■ ■

吉野町・桐井雅行 ひとつはさくらで町おこしということでございまして、私が知っている限りでも5つか6つの町や村が「日本一」ということを標榜なさっている。日本一というのはどういうことなのか、それは聞いてみないとわからないのでありますが、どなたかがおっしゃったように、数を誇って日本一がいいのか、内容がいろいろなさくらがあつての日本一がいいのか、あるいはさくらでも隣の方がおっしゃったように花びらを見て日本一がいいのか、いろいろあろうと思っておりますけれども、果たしてさくらで村がおきるか、町がおきるかということだと思っております。

私の町、吉野町というのは、人口1万5,000を少しきるのでありますが、さくらが植わっているのは、先ほども申しましたように、実に古い時代から植え続けられてきて、現在もございまして、これは一部、大字吉野山というところでありまして、昭和11年に国立公園に指定されて、大正の13年でしたか、史跡及び名勝ということで、これは文化財保護法の保護と一緒に規制も受けるわけでありまして、そんな中で吉野山のさくらがあるわけでございます。

吉野町の人口が1万5,000人で、そこに住んでいるのが、その1割ぐらいです。実際に生活しているのは、その1割の人間しかさくらでは生活をしていないわけです。もちろん、そのために旅館が20軒ばかり、国民宿舎が1軒と、あと民宿が数軒ございまして、一晩に泊まるお客さんというのは3,000人そこそこございましてね。その3,000人そこそこのお客様に関わるような商売をしている人たち、それはいろいろございまして、クリーニング屋さんからプロパンガス屋までに至るまでいろいろな業種が関わってきて、そこにもたらず経済効果というものは少なからざるものがあるように思いますが、町全体から考えると、それはあくまでも1割だと考えていいのじゃないかと思っております。

今、ずっとお話を伺っていると、さくらをこれから植えていきたいんだというお考えでございまして、おそらく、町がおきるかどうかということは、私は別な次元の問題じゃないかと思っております。

私どもの町というのは、要するに冒頭にも申しましたように、さくらで飯が食えるから、ということでありまして、全く経済林ではないわけでありまして、365日のうち350日まで花のない時期を過ごすのがさくらでございまして、そんな花のないようなさくらというのは、まったく緑の影を作るだけ。どうかすると秋になって木の葉が散ると邪魔になるだけというふうな、そういうさくらの木でありますけれども、あまり町の中にございませんで、いくら木の葉が散ったって邪魔にはなりませんけれども、そういったものがさくらじゃないかなというふうに思います。

私どもが大事にする以上に、全国の人たちが心を寄せてくださるさくらでありますから、もちろん決して邪魔にはしていないわけでありまして、もしこのところで、さくらで町をおこそうということをお考えの場合、決して植えただけではだめで、やはり長い伝統と歴史というものがそれを作っていくんだ、と。私どもが生きているうちにできたさくらではなくて、私たちが今楽しんでいるさくらというのは、おそらく私が知らない世代のじいさん、ひいじいさんくらい、あるいはそれから上かもしれませんけれども、そういう人たちが植えてくれたさくらでございまして、あと私たちが植えていくのは、もちろん後々の時代の人間、楽しんでいくのは後々の人間じゃないかと思えます。

そうすると、町おこし村おこしというためにさくらを植えるには、果たして行政がどの程度関わった方がいいのか。私の町の場合は、まったく行政が関わっていないのでありまして、今、保護のためには多少の関わりは見せておりますけれども、ほとんどが民間の力とあっていいのではないかと。今日は町村長さんもたくさんいらっしゃいますけれども、仮に今の町村長さんがそういうことでやられる、何年か後に、「俺はあの町村長には反対だから、さくらは知らないんだ」ということになりましたら、行政はかえってさくらを哀れな目にあわせてしまうようになりはしないかな、と。それだとかえって行政は、金を出して口は出さないというふうなことで、あとは民間の人たちが原則的な努力をされるということが、後々大きなさくらの町に成りうるひとつの見方じゃないかと思うわけです。

ちなみに申し上げますと、私たちの町は、さくらだけでは決して一時の春でありまして、だめであります。そのもつともさくらに関わりがあると思えますけれども、古い建造物であるとか、古跡であるとか、いろいろなものがありまして、今吉野町がかかえている建造物、工芸品、あるいは書籍、絵画、考古資料、いろいろまじえまして、国の指定する国宝重要文化財が67件ございまして、県の指定するものが17件ございまして、全部で84件の国宝重要文化財を抱え、それからまあ、いいか悪いかは別にいたしましても、史跡及び名勝と

いう保護と規制の枠の中で生きているということでありまして、そういったものを深く歴史を経て、お客様たちが楽しめるということになりますと、さくらだけではだめじゃないかなという気がしますね。

で、花の咲かないさくらはだめだというので、どなたかおっしゃいましたけど、ソメイヨシノを植えたらテングス病にかかるんだ、と。テングス病にかかるソメイヨシノだったら、私は植えないほうがいいんじゃないかと思いますが、植えたらそれを切りゃいいというので、果たしてソメイヨシノのためにテングス病の枝を切っていいものかどうか。人間は花を楽しむために、テングス病の枝は花がつくことがございせんから、花のつかないような枝を切っていいかどうかということは、さくらの命というものとまた別じゃないかと思うのです。ただ人間が楽しむためにあっていいものではなくて、植えた以上は、どうともあれ、たとえテングス病がつかましても、切るよりはさくらのためにいいんじゃないかという気がしてしょうがない。このへんのところは、また別に、お聞かせ願いたい。吉野先生あたりにお伺いできたらいいんじゃないかと思えます。

■ ■

山下武之 ありがとうございます。このへんからフリートークということで聞こうと思えますが、今、さくらで町がおきるかどうかという桐井さんのほうからそういうお話があったのですが、そのへんのことで、どなたか。

■ ■

木次町・森脇長逸 私はあまり喋ってはいけませんが、私のほうがこのさくらサミットをお願いしたり、あるいはシンポジウムをやったり、またさくらを10年の総合振興計画の中の先導的事業として、さくらのまちづくりをやろうということは、さくらで飯を食うというような考え、全般にさくらによってやるという考えではありません。また、それでできるものではありません。吉野のような、それこそ何百年前からできているところと、これからのたかだか50年、60年前からさくらが植えられている——この木次町あたりも昭和の初め頃に小学校の子ども等に苗を担当させて、お父さんお母さんが一緒になって育てた木は、この現在のさくら並木になっているわけですが、これはまあ、本当に半世紀ちょっとのことからございまして、いわゆる財産としてようやくできてきたわけだと思えますけれども、それでさっきおっしゃるように、1週間やそこらで飯が食えるということは、そういうことは誰も考えておりません。

ただ私の考え方としては、木次町も実際には商業、工業、農業で生活を立てているわけ

でございます、特に最近51年頃から誘致企業等々が大きな生産をあげておりまして、実際問題としては、そういうところ。それから本当に飯を食っているのは、サラリーマンというようなことが多いわけでございます。しかしサラリーマンをどういうふうに統合するか、あるいは商業の販売店をどうして統合してまちづくりにもっていくか、あるいは工場を統合してどうしてもっていくかということは、なかなか難しいわけでございます。やはり町長としては、昨日もお話がありましたように、住民の心をよく考えて、ある一点に集中団結して、「町を一生懸命やろう」というふうにすることを考えないといかん。そうやった場合に、これから21世紀を目指した高齢化社会等という施策はありますが、また産業もいろいろ変わってくると思います。農業も変わってきます。その中で、やはり住民の心を一点に集めるまちづくりには、今までたかだか半世紀あまりに出来てきたさくらを、非常にみなぎが大事にしている。ここに住民の心を集中させてまちづくりにむかったほうが、非常に活性化に役立つということでございます。

したがって行政も手伝いますし、民間のさくらの会等にもはたらきかけて、そしてこの町を、まちづくりの先導的な事業としてのさくらのまちづくりをやっていく。それと先ほど申し述べましたように生涯教育というものをもって、心をさくらと一体にした平和な、あるいは協力的なまちづくりをしていく。こういう考えのもとにやっているのでございます、さくらで食えるかというような気持ちではまったくございません。

■ ■

■ 山下武之 はい、どうもありがとうございました。だから、さくらというのはどちらかというと、精神的というか、シンボル——その町のシンボリックな要素もかなりあるんじゃないかという気がいたします。

ここでちょっと、オブザーバーの吉野先生に、さくらの専門的なところ。そして金井さんから全国的に、どこで、またどういうふうな形でさくらをやっているか、ちょっとその辺のところを、お時間をいただいて聞いてみたいと思います。吉野先生、お願いします。

■ ■

提 言



■オブザーバー
前島根大学教授・附属農場長

吉野 蕃人

今、いろいろとお話がでてまいっておりますが、本日お集まりいただいておりますように、この日本列島、北から南までずいぶん長い地理的な関係にありながら、やはりこの中で共通の話題としてもてる、これはやはりここにさくらがあったからじゃないかと思えます。このさくらがあったからこそ、こうやって、さくらサミットもできていく。したがって、昔からの日本人の心というものが、ひとつのさくらを通じて、互いに結び合うことができるようになってきた。これは昨日申し上げましたように、日本人がさくらをもとにして農耕の基盤としたり、あるいは信仰としてさくらを求め、それから発展してきました花見に進んでいく。そういうふうなひとつの経過をたどってきた。そのさくらがやはり日本人の心として、根づいてきた。そのことがやはり今日、こういうふうに表示されているという点で、やはりさくらはさくらの効果があったんだと思っております。

と同時に、いろいろとお話をお伺いいたしましたが、それぞれの町村におきましては、それぞれの歴史があり、また文化財をおもちになっている。同時にその町村自体が、非常にそれぞれの個性をおもちになっているわけでございます。だからその個性というものをどのようにさくらと結びつけて発展させていかれようとするかということが、ここにあると思えます。

そして、その中においては、やはりこの程度まではできるんだけど、これ以上はできないんだということもありません。また、その町村自体としてはそのようになっているけれども、他から見た人によりましては、「いや、もっともっとそれをもとにして活性化していく、ひとつの方向に向かっての進め方ができるんだよ」というふうなことも出てく

ると思います。が、いずれにしても、ここでさくらというものを築くにいたしましては、ひとつの村おこし、町おこしというものを進めていかれようとする。それには当然そこに空間がなくてはならない。空間がなくてはならないということは、今までどちらかというと、過密になってきたところにおいては、さくらというものはもうできない状態であるわけでごさいます、したがって、たまたまお集まりになっている方々のところは、それなりの空間をおもちになっているということから、これから後にさくらをより多く植えていくという可能性をおもちになっているということになるんじゃないかと思えます。

それからさくらをどういうふうに見ていくか。さっき吉野町の観光課長さんのお話もごさいましたのですが、さくらをどういうふうに見ていくかということでごさいます、これはいろいろな見方があると思えます。それに対しまして、木次町の町長さんのお話になりましたようなとらえ方、それからまったく産業的なものとのとらえ方、いろいろのとらえ方があると思えますけれども、やはりこのさくらというものは、そもそも日本においては、「見るさくら」からスタートしてきているわけなんです。どちらかといいますと、産業ということよりも、文化的という面から進んできたものでございます。

したがって、これを今の時代になって、「じゃあ、これでもって経済的に優先させていこう」としても、これ自体、もうすでに無理がある。しかしながら、世の中はすべて経済的なものだけで考えるべきではありませんでして、やはりこのさくらというものを、その地域のシンボルとして、そしてさっきも木次町長がおっしゃいましたように、それがひとつの町民、村民の拠所になって、より経済の活性化の拠所ですね、そういうものになっていくんだ。あるいは情操教育の面においても、効果をあらわしていくんだ、と。それからまた、その地区の人が、それなりのさくらが植わっていることによって、やはりプライドをもつ。これはその中におられる人もありますが、またこの地域から外に出て働きに出る人だって、「いや、自分のところの村は、これだけのさくらがあるんだよ」「自分のところの町にはこれだけの立派なさくらが」、これはやはりプライドでございます。やはり人間の心の豊かさというものに関わってくるんじゃないかと思えます。

これが機軸になりまして、いろいろと経済面、産業面、そういうものが活性化されていく。そういうふうには私は思っております。したがって、さくらを育てるということは、人間を育てるということと相通じるのだということでごさいます、さくらを育てていくということが、そのままやはり教育である。教育は確かに、そこに金を注ぎ込むから目に見えてそこに効果が現れてくるというものではございません。しかしながら、日本の国が

やはり明治になりましてから、それぞれの村にすべて小学校をおいて、国民の教育をやってきた。それが第二次大戦にあれだけひどい目にあわされて負けても、再度立ち上がって、ここ40年間にまさに日本は世界に冠たる経済国になってきた。これはやはり教育だと思えます。だからこれを、さくらを通じながらも教育というものが私はできていく、というふうには思っております。

したがって、さくらをただ植えるのではなしに、その植えたさくらをいかに育てていくかという、育てることをやっていくところに教育があるんだと思っておりますので、さくらというもののとらえ方、いろいろな考え方、視点があると思えますけれども、私はそのような考え方でとらえていくのが、やはりさくらに対してのとらえ方ではないだろうかと思うわけでごさいます。

それからさっきテングス病の話が出ましたので、ちょっと触れておきたいと思えますけれども、植物に限らず、生物というものは人間を引っ括めまして——まあ、人間も生物のひとつなんです、本来元気なものなんです。自然の中で耐えていく力をもっています。それは、私は実はシベリアで暮らしてきました、シベリアの生活をしてきた。普通だったら、あんなところは死んでしまうのが当たり前なんです。それを生き延びてこれたというのは、人間がああいう中で耐えられる能力をもっていたということ。それはすべての生物にいえる。

私は花き園芸というものをずっと専門としてやっておりますが、私の基本的な花き園芸に対しまして栽培の哲学というものは、基本的に植物というのは強いものだという考え方なのです。ただ、それを取り巻いていく環境の中から、いろいろな植物を弱くしていく条件を与えていっているわけなんです。それを人間の手でいろいろ取り除いていく努力をしていかなければならない、というふうには思っております。

したがって、テングス病も、本来木を健全に育てる努力はしてやらなければならない。それは何かというと、まず根を健全にしてやる。我々の胃腸と一緒にございます。根を健全にしてやるということ。それからそれを取り巻くいろいろな環境がございます。空気中の問題、雑草の問題もございます、虫の問題もございます。そういうものをやはり人間のほうが手を伸べてやって、できるだけ排除してやる。これが第一だと。要するに、病気というもの、かからないような条件にまずしてやっていく、ということ。しかしながらこれは、世の中には病気がないということはないわけでごさいます。あるわけですから、かかるわけです。したがってかかったものには、やはりそれなりの手を施しておかなければ

いうのはやはり町内に植えて、わずか10日であろうともそれを咲かせて、緑豊かな郷土づくりをしたいというようなことで、私の町ではしておりますので、決して日本一になりたいとかどうか、そこまでのことは思っておりませんけれども、私はこのさくらという町花町木を決めていたために、この木次との交流もできますし、姉妹町の縁組もできまして、そして瀬戸内にさくらの架け橋をかけて、そして交流をいたしましょうということで、昨年したわけでございますが、その後思わぬいろいろな交流ができました。

例えて申しますと、少年の、小学校5、6年生でございますけれども、そのソフトボールの大会をこの地でやらせていただきまして、そして帰ってその少年たちが書いている作文を見ますと、非常にいい体験をさせてもらった、と。非常に多くの友達ができたと。もう一回、木次には必ず行ってみたいというように、非常にその作文を全部読みまして、こちらにもお送りしていると思っておりますけれども、そのようなことがございます。

あるいはその他、婦人会の交流でありますとか、遺族会の交流でありますとか、あるいは議員さんのソフトボールの大会とか、いろいろなことをして、産業、文化、いろいろな面での交流がさくらを中心にしてできているというようなこと、これらもさくらを町花町木にし、さくらで村おこしをするという、直接はできないにいたしましても、そういう精神的な面で、非常に貢献しているというふうに私は考えております。でございますので、昨日のシンポジウムについても大変勉強させていただきましたし、また今日の皆さん方のご提言、サミットにつきましても、私はよかったと思っておりますし、それからまあいろいろありますが、今後においてもやはり交流会をできることならもっていただいて、いろいろと意見の交換をさせていただきたいと思っておりますので、付け加えておきます。

■ ■
■ 山下武之 ありがとうございます。

共同宣言

■ 山下武之 さて、皆さんのお手元に、共同宣言という案をおいれしてございます。ちょっと目を通していただきまして、型通りの儀式みたいなことかもわかりませんが、やはりここでひとつ、まとめをしていただいたほうがいいのではないかとということで作らせていただきました。もしそれでよろしければ、拍手をいただきまして、森脇町長さんのほうで、一応宣言として読んでいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしゅうございますでしょうか。(拍手)

ありがとうございました。それでは町長さん、お願いいたします。

■ ■

(木次町・森脇長逸町長による共同宣言朗読。)

共同宣言

秋田県角館町、群馬県鬼石町、長野県高遠町、奈良県吉野町、岡山県瀬戸町、鳥取県西伯町、島根県美都町、愛媛県川内町、熊本県水上町、宮崎県北郷町、島根県木次町の首脳が一堂に会し、昭和63年4月11日、第1回さくらサミットを開催した。

この11町村は、「桜」によるまちづくりをめざしているという共通の目標を持つ縁で結ばれたきずなをもとに互いに友好を深め、個々の地域振興を図り、情報の交換を密にしながら、「ふれあい」と「連帯」を築いていくことに合意するものである。

われわれは、共通の目的である「桜」によるまちづくりを基調に、21世紀に向けての地方自治体の進展と住民の福祉・生活文化の向上に互いに務めることを、ここに宣言する。

昭和63年4月11日 第1回さくらサミット
(島根県大原郡木次町会場)

■ 山下武之 どうもありがとうございました。

山下武之 では最後に、木次町の森脇町長から、閉会のご挨拶をお願いしたいと思います。

閉・会・挨・拶

サミット実行委員会会長
木次町長
森脇長逸

それでは閉会のご挨拶を申し上げます。

本日は、本当に多数の町村長さん、また代理の方々にお集まりいただきまして、第1回のさくらサミットを開きましたところ、大変活発なご意見が出まして、大変喜んでいただいております。先程来、いろいろなさくらを中心としたまちづくりに対するご意見が出ましたが、私は関口町長さんのお話にありましたように、やはり町をつくっていくには、基本的にはやはり人づくりだ、と。人が立派でなければ、どんなに経済を發展させようとしても、あるいはいろいろな施策をやりましても、可能性が少ない、と。やはりさくらを中心とした気持ちをもって、人づくりしていく。それが村おこしにつながるんだというお話が結論的に出たように、私は思っているところでございます。本日の司会をやっていただきました山下さん、それから吉野先生、また、ぎょうせいの金井開発課長さんに大変ご助言ご協力を賜りまして、本町のこの会が大変成功裏に終わりましたことを、皆様方に深く感謝を申し上げ、第2回目にはまたこそぞって、もっと多くの方々がお集まりいただくことを祈念して、閉会のご挨拶にかえます。どうもありがとうございました。



●木次町斐伊川堤防

SAKURA SUMMIT IN KISUKI

**第1回さくらサミットinきすき
記録誌**

—“桜”によるまちづくりと地域間交流—

発行日 昭和63年9月

発行者 木次町役場

〒689-13 島根県大原郡木次町大字木次1013番地1

TEL (08544) 2-1122

企画・協力/ぎょうせいクリエイティブシステム
(財)地域活性化センター

The background of the entire page is a soft, warm-toned illustration of falling cherry blossoms. The blossoms are depicted as white petals with delicate pink and red hues, scattered across a light yellow and orange gradient. The overall effect is a gentle, spring-like atmosphere.

KAKUNODATE

ONISHI

TAKATOH

YOSHINO

SETO

KAWAUCHI

第1回さくらサミットinきすき

“桜”によるまちづくりと地域間交流

発行日 昭和63年9月

発行者 木次町役場

企画・協力ノぎょうせいクリエイティブシステム
(財)地域活性化センター